

錦江町農業委員会だより

平成二十四年に向けての農業委員会

錦江町農業委員長 宿利原 勝吉

平成二十四年の辰年 明けましておめでとうございませう。

昨年、三月十一日の東北地方での巨大地震、津波、原発事故など、かつて経験したことのない大災害に見舞われ、農業部門でも大きな被害を受けました。又、政府はTPP（環太平洋連携協定）により市場開放にかじを切り、農業部門をはじめとして国内の経済を揺るがす大きな問題となっているところでございます。

錦江町内の農業でも、農業者の高齢化、担い手不足、鳥獣被害の拡大、農業諸資材の高止まりなど農業を継続するには厳しい条件が重なり、耕作放棄地の増加が顕著に表れています。更に昨年JTが葉タバコの廃作奨励金を出して、廃作希望者を募ったところ、多くの耕作者が廃作され、今後の作付をいかにするか大きな課題となっています。

このような中、昨年七月には、農業委員改選があり七名の新人委員と一名の元委員が、新たに農業委員活動を行うこととなり、早く一人前の農業委員として活動できるように、研修や学習に研鑽しているところでございます。農業委員活動の法令事務では、公平且つ公正な総会の審議を進め、特に現地調査に基づく調査報告を総会の場で報告して、権利の取得要件等を中心に厳正に審査を行いながら適正な事務に努めるところでございます。

農地パトロール業務は、農地利用状況調査と併せて行い、町内の遊休農地の解消に努めながら、担い手農家への集積が図れるように努めてまいりたいと思っております。

これらの他、農業委員は農業者の代表として、農家等の皆様の相談相手として、日頃から活動してまいりますので、町民の皆様のご理解とご協力を宜しくお願致します。

農業委員先進地研修の実施

農業委員会では、昨年十月

三十一日から十一月二日にかけて、熊本県人吉市グリーンツーリズム推進協議会の運営と、グリーンツーリズムの農業における効果、エレン水を利用した有機農業の実態及び農業の六次化を研修しました。

今回の研修は閉塞感の漂う中で、今後の農業をいかに発展的に運営していけるかということテーマに掲げたところであり、いずれも農林水産省が現在進めていることを学んだものであります。



グリーンツーリズムは、都市と農村の交流の場を提供して、農村のもつ

食や農村文化で人と人を繋ぎ、農村の持つ魅力を都会の人に伝えるものであり、かつ宿泊体験や農業体験を通じて、宿泊や食を提供することにより、収入も得るもので、鹿児島県内でも南さつま市などを中心に垂水市でも修学旅行で学生を受け入れているところでもあります。錦江町内にもこのような受入る要素は多くあり、このような取り組みの実態を学んだところでもあります。

有機農業は、安心安全な農作物の提供として切り離すことのできない農産物の生産手段ということでもあります。その中でエレン水を活用した有機農業については、農政関係者で組織する技連会で、昨年研修をされたとのことで、今回農業委員会でも熊本県で本格的に取り組まれた優良事例の3農場を視察したところでした。

これからの農業は農産物に差別化を図った方式の農産物が注目されるのではないかと思われており、健康的で、安心して食する農産物を消費者に届けることも農業者の務めかもしれません。

農業の六次化では、甘藷を菓子加工して全国展開をする農業生産法人でしたが、全国展開のシェアを縮小して熊本県内を重点に考えていけるような構想でありました。鹿児島県内でも甘藷を使った菓子類が多くありますが、一般の農業者がこのような取り組みを行うには大きなリスクもあり起業的な取り組みは難しいものがあるようです。しかし原料の甘藷の生産となると技術的にも有しているの

で、このような企業との連携は出来るのではないかと考えます。町内の甘藷農家も規模拡大を目指していますが、販路拡大を目指した取り組みも大事になるのではないかと感じました。

振興戦略づくりに向けての報告があり、有意義な会合が持たれました。交流会では、グラウンドゴルフや懇親会も開かれ、認定農業者と農業委員の意見交換がなされたところであり、このような活動が明日を切り開く原動力になることを期待するところで。

認定農業者と語る会

錦江町内の

認定農業者は現在一六四名登録されており、その中で認定農業者連絡協議会に入

会されている認定農業者は三九名いらつしゃいます。十月二十五日に認定農業者と農業委員と語る会を開催して、認定農業者から錦江町の農業についての意見をお聞きしたところで。

今回は、鹿児島大学農学部長 岩元泉先生と李哉法准教授の特別講演で、錦江町の地域産業

